

私にならう者となれ

パウロは4：6～13において実に厳しい言葉で、コリントの指導者たちの分派主義を非難し、彼らの高慢に一撃を加えた。特に8節以下の言葉は彼らの思い上がった、高慢な態度に対する強力なパンチであった。しかし14節以下では、前節までの激しい口調から、一変してやさしい、愛に満ちた調子でコリントの人々に語りかける(14～16)。ここには使徒パウロの、使徒・伝道者として心情が感動的に吐露されている。

第1に、これまで厳しいことを語ってきたのは、あなた方を辱め、傷つけるためではなく、私の愛する子供としてさとすためであった、そのような愛の心から出たことなのだという。第2に、15節でこう言う、たとえあなた方には、キリストにある養育係が一人あったとしても、父親が大勢いるわけではない。キリスト・イエスにあって、福音によりあなた方を生んだのは、この私なのである、と。

養育係とは子供の世話をするために立てられた僕で、学校の行き帰りに、荷物をもって同伴し、家では身の回りを世話し、外出の時にはいつも子供に付き添って仕える奴隷のことである。時には教育や行儀作法のしつけまでしたという。しかし、所詮は身分の低い奴隷であって、父親に代わる者ではない。使徒パウロはここで、この「養育係」と「父親」とを対比させて、彼とコリント教会との特別な親密な関係を強調し、彼らに対する使徒としての特別親密な愛の感情を表わすのである。

第3に、16節で彼は言う「そこで、あなたがたに勧める。わたしに倣う者になりなさい」と。ここで「倣(なら)う者」と訳されている語はミメーテースで真似をする人、模倣者を意味する。子供たちは見本を手本にまねることによって字を学び知識を身につけていく。人間の成長も同じである。親は子供の見本である。子供は親の生き方、考え方、生活の仕方を見て成長する。私たちキリスト者もそうである。信仰の先輩たちを見て成長する。

パウロは言う。「あなたがたに勧める。わたしに倣う者となりなさい」。それは、私は完全であるから、私に従えという傲慢な言葉ではない。そうではなくて、11：1で明らかに語っているように、私がキリストにならう者であるように、あなた方も私にならう者となれ、というのである。最終的なお手本はキリストである。そのキリストをしっかりと見て、目を離さない、キリストの心を自分の心とし、キリストの生き様を自分の生き方とする、これが「キリストに倣って生きる」ということの意味である。

こうして私たちは日々「主を見つめつつ／主にならいつつ」変えられていく。使徒パウロは福音を単に「教えとして」宣べ伝えただけではなく、自分の生き方・全存在をもって示した人であった。彼はそれを「キリスト・イエスに結ばれた私の生き方」と言っている(17節)。パウロにとってキリストに生きるとは「恵みに生きる」ということにほかならなかった。私の内には誇りとすべきものは一つもない。今あるはただ神の恵み！！この神の恵みに生きること。主の恵みに生きること。パウロが1章からこの4章まで繰り返し語ってきたのはまさにこの一点であった。人間的な知恵や力を決して誇らない。ただキリストの恵みのみを誇りとして生きる。そこから、人間の知恵や力を誇る一切の傲慢が取り除かれ、謙遜と感謝の生活が生まれてくる。「私にならう者となれ」とは、そういう生き方をあなた方も学んで欲しい、というのである。